

# 故郷と田舎―山形の地域イメージに関する一考察

岩 鼻 通 明

はじめに―民俗学における「ふるさと」研究

一九九五年秋の日本民俗学会年会における公開テーマ講演は「故郷を問う」というテーマで開催され、その記録が学会誌に活字化されている<sup>1)</sup>。また、安井眞奈美氏も「ふるさと」研究に関する論文を記されたが<sup>2)</sup>、その注を一見すれば、たいへん数多くの研究の蓄積が民俗学に存在することが知られる。

にもかかわらず、この公開テーマ講演を傍聴していた筆者にとって、いまひとつかみ合わない議論（シンポジウム形式の常ではあるが）と、「ふるさと」研究に関する民俗学の論文の多くに、違和感を抱いたのは何故だろうか。

この公開テーマ講演において、講演者のひとりであった倉石忠彦氏のコメントである「都市の田舎者にとつての根っこが故郷である」という一文に筆者の違和感の所以を見いだした気がする。

故郷と田舎―山形の地域イメージに関する一考察

すなわち、従来の「ふるさと」研究は、地方（もしくは村落）出身者の都市における立場を立脚点とするものが圧倒的に多かった。しかしながら、人口移動そのものは双向向であるから、当然、都市出身者で地方生活者も存在するわけである。

実は、筆者自身が大阪出身であり、山形に十数年来居住する中で、さまざまに感じてきたことがあるため、従来の「ふるさと」研究とは逆の視点から私見を述べてみたいとの思いが本稿の契機となった。

## 一 山形市は都会か田舎か

県庁所在地としての山形市は、都会か田舎かという判断基準が難しいといえよう。筆者の所属する大学の学生にとつても、大都市圏出身者は何もない田舎だと感じるし、地方の小都市や村落地域出身者にとつては都会だと感じるとい

う両義的存在となる。

しかし、山形新幹線開業時のコマースヤルは、どう見ても山形を都会とは表現していなかったといえよう。田舎の雰囲気たっぷりのコマースヤルが連日、山形のテレビ局からも流されていた記憶がよみがえる。

さて、山形新幹線が一九九九年十二月に新庄まで延伸されるが、この資金には県民の税金がもっぱら投入されている。再び、大都市圏の乗客を当て込んだ山形新幹線開業時と同様のコマースヤルが繰り返されることになるのだろうか、受益者が県民に限定されるわけではない山形新幹線に大量の県民の税金を投入することが果たして妥当なのだろうか。

もちろん、観光業をはじめとして県内に一定の利益が入るのは確かであるが、JR当局にすら、黒字になるまでには三十年かかると言わせる山形新幹線の新庄延伸に、いったいどの程度の波及効果があるのだろうか。

私見では、次章で考察するように、山形は東京から一番近い田舎であるという点が東京人の抱く山形に対する地域イメージといえよう。山形新幹線開業時のコマースヤルは、そのような東京人の心を刺激したのであった。

ところが、山形県内でも、最上地域は観光的にも空白地帯であり、地域イメージが希薄である。山形新幹線の新庄

延伸にたいする不安感はそのにある。

## 二 映画にみる山形の地域イメージ

上述の私見を裏付ける材料として、三つの映画とひとつの漫画を紹介したい。まずは、数年前にヒットした「Shall we ダンス？」(一九九六年)を取り上げよう。

この映画には、山形市出身の女優である渡辺えり子が出演している。彼女は山形県内では「故郷に錦を飾った」有名人であるが、彼女や伴淳三郎、ケーシー高峰、あき竹城、ウド鈴木と県内出身のタレントの名前を列挙すれば、いずれも田舎臭さを売り物にしていることに容易に気が付くだろう。これらのタレントたちもまた、東京から一番近い田舎という山形の地域イメージづくりに貢献してきたといえよう。

この映画「Shall we ダンス？」はアメリカでも大ヒットしたそうだが、何かの記事で、渡辺えり子の出演場面が大幅にカットされたと読んだことがあった。なんでも、いわゆるオバタリアンはアメリカには存在しないので、理解困難な場面が大幅にカットされたと説明されていたように記憶するが、筆者の憶測では、いわば差別的表現とアメリカ人がみなした場面がカットされたのではなからうか。

すなわち、その背後には「山形」という地域と「山形人」という住民に対する差別感（東京人からすれば優越感）が存在しているのではなからうか。これらのタレントたちは、いわば差別される「山形人」の代表なのであるが、逆に故郷では、東京で功なり名を遂げた「山形人」が優遇されるという両義性を有している。

もうひとつは、それよりしばらく前に公開されたアニメ映画の「おもひでぼろぼろ」（一九九一年）である。この映画は都会人の女性が紅花栽培で有名な山形市高瀬地区の男性と恋に落ちるといふ内容であるが、東京から一番近い田舎という地域イメージをたいへん上手に描いていると思われる。いわば、都会で見失つたものを田舎で取り戻すという舞台設定になっているのであり、山形の景観を効果的に演出した名作であるが、残念ながら一九九四年の山形国体と山形新幹線開業にともなう開発によって、失われてしまった景観も少なくない。

ところで、この映画が地元の山形で大ヒットしたという話はあまり聞かない。むしろ、都会人から好評を得ているように思われる。この映画の前作が、あの「となりのトトロ」であり、そこでは失われた武蔵野の景観が舞台となっていたのが、この映画では現存する山形の景観が舞台として使われたのであり、ふるさとの景観を描いたという面で、

故郷と田舎―山形の地域イメージに関する一考察

連続性のある内容となっているのである。

さらに、中国・香港共同制作の「南京一九三七」（一九九五年）にも、意外な場面で「山形」が登場する。主人公の中国人医師・成賢と日本人妻・理恵子が、国際安全区めぐりして避難中に日本兵に発見される。成賢の出身地を問われた際に、「私の里は、」と言いかけたのをさえぎって東京出身の理恵子とはとつさに「山形です。主人は口べたなものですから」とごまかす。そうすると、日本兵は「山形でも、こんなきれいな奥さんをもらせるんですか」と答えたのであった。すなわち、東アジアレベルにおいても、山形の地域イメージは共有されているといえよう（おそらくは、東京人の地域イメージの反映ではあるが）。

最後に、漫画の「YAWARA!」の例を紹介しよう。主人公の猪熊柔の恋人（フストはハッピーエンドとなるが）であるスポーツ新聞の記者が山形県出身（村上山村という架空の地名ではあるが、内陸の村山地方を想起させる）という設定で、ドジで鈍感な人物として描かれている<sup>3)</sup>。これもまた、東京人の地域イメージの反映といえよう。

## おわりに

人文主義地理学者のイーフリー・トゥアンによれば、都市

の本質的な特徴は「自然からの距離」であり、農業からの分離・冬の文化的な生活・夜の征服という三点にまとめられるという<sup>6)</sup>。雪国の山形市を例に、これらの点を考えれば、まだまだ都市であるとは言いい切れないであろう。

しかし、これらのトウアンの提言は都市民俗学の研究対象としても貴重なものではなからうか。都市民俗学という分野が登場して久しいが、分析の枠組みがまだまだ限定されているように思われる。より多面的なアプローチが必要とされよう。本稿は、そのひとつの試みである。

## 注

- 1) 倉石忠彦他「特集：第47回日本民俗学会年会公開テーマ講演『故郷』を問う」日本民俗学二〇六、一九九六年。
- 2) 安井眞奈美「ふるさと」研究の分析視角」日本民俗学二〇九、一九九七年。
- 3) 岩鼻通明「東北地方における高速交通網の整備と課題（発表要旨）」季刊地理学五〇―一、一九九八年。
- 4) 千田稔「都」―「鄙」関係の構造」地理三七―九、一九九二年。なお、本稿の執筆を着想したのは、一九九八年六月に東京学芸大学において開催された歴史地理学会大会のシンポジウム「都市・村落論再考」における千田稔氏の

報告「日本におけるキナカ（田舎）の成立」と討論に際してであった。その討論では、田舎への差別感の有無が論議の対象となったが、筆者は差別感の存在を前提とする千田氏の立場に同調するものとして、本稿を構想した。

5) 浦沢直樹『YAWARA!』二十二、小学館、一九九二年。

6) 山田晴通「田舎と都会の間、あるいは『あの日の僕をさがして』をみて」地理三七―九、一九九二年。